実践報告

保育内容「環境」に関する教材研究
―光る泥団子をテーマとした「卒業課題研究」における取り組み―

春原　淑雄

（西九州大学短期大学部）

（令和４年１月 31 日受理）

A Study on the Teaching Materials of Childcare Contents "Environment"
― Efforts in "Study of Graduation Subject" with the Theme of Shining Mud Dumplings ―

Yoshio HARUHARA

(*Department of Local Life Support Sciences, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted January 31, 2022)

Abstract

This paper reports on the contents and results of the mud dumpling research that has been continuously developed in the "Study of graduation subject" since 2019. The main contents of the report are 1) the educational meaning of making mud dumplings and 2) the development of a method for making shiny mud dumplings (teaching material research). It has been clarified that making mud dumplings is a play that encourages understanding of the nature of substances, the development of thinking ability, and various sensibilities, and is a teaching material that guarantees a learning experience suitable for early childhood children. After that, we clarified the production process and the points of the shiny mud dumplings made of soil and that made of plaster.

Key words:　保育内容「環境」 the contents of child care（environment）
教材研究　teaching materials study
泥団子　mud dumplings
卒業課題研究　study of graduation subject

１．はじめに

本稿は、幼児保育学科で開講されている「卒業課題研究」での取り組みを報告するものである。筆者の担当する「卒業課題研究」では、2019 年度から子どもが好きな遊び「泥団子作り」をテーマとして掲げ、学生たちとともに活動を展開している。具体的な取り組みとして、泥団子作りの教育的な意味の探求、制作方法の開発と習得、泥団子教室の開催など、泥団子作りに関するあらゆる研究・教育活動をおこなっている。

なぜ泥団子作りを「卒業課題研究」のテーマとしたのか、その経緯をはじめに述べておく。泥団子作りは、多くの子どもが興味をもつ遊びである。実際、学生たち自身も「子どもの頃によく作った」「丸くなめらかなに仕上げたかったが、途中で割れてしまうなど何回も失敗した」という経験をもっている。また、学生たちが教育・保育実習で出会った今の子どもたちも、泥団子作りに夢中になっているという。「子どもたちから作り方を教えて貰った」「子どもたちと一緒に作ったが、すぐ壊れてしまった」という学生も少なくない。今も昔も子どもたちに人気の遊び「泥団子作り」、泥団子を上手に作れるようになって、子どもたちに作り方を教えたり、一緒に泥団子作りを楽しんだりしたい、学生たちのそのような思いが泥団子研究の出発点にはある。加えて、筆者が「服や手が汚れる」という理由から、子ども期に砂や土で遊んだ経験が乏しく、泥団子作りをしたことがなかったことも、テーマ選択にわずかではあるが影響している。

本稿では、2019 年度から「卒業課題研究」で継続展開してきた泥団子研究の内容と成果の一部を報告するものである。主な報告内容は、泥団子作りの教育的な意味と、光る泥団子の制作方法の開発（教材研究）である。泥団子作りの教育的な意味については、保育内容の領域「環境」の視点を踏まえながら論じていく。光る泥団子の制作方法については、文献研究から泥団子の制作方法を分類・整理したうえで、学生たちとの実践を通して見いだした、現時点で最適と判断される制作方法について紹介する。

２．泥団子作りの教育的な意味

泥団子作りは、多くの子どもが興味をもつ遊びである。幼稚園や保育所、認定こども園等で子どもが泥団子作りに夢中になっている様子をよく見かける。泥団子作りには、子どもの育ちや発達に繋がるさまざまな要素が潜んでいる。この点について、保育内容の領域「環境」の視点を踏まえながら、検討していく。

幼稚園教育要領（文部科学省、2018 a）における領域「環境」の内容[i](2)には、「生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ」と示されている。幼児は、さまざまな物に囲まれて生活し、それらに触れたり、確かめたりしながら、その性質や仕組みなどを知っていく。初めは、感触を試し、物との関わりを楽しんでいるが、興味をもって繰り返し関わる中で、次第にその性質や仕組みに気付き、幼児なりに使いこなすようになる。物の性質や仕組みが分かり始めると、それを使うことによって一層遊びが面白くなり、物との関わりが深まる。物の性質や仕組みに気付くことと遊びが面白くなることが循環していく。

図表１　泥団子作りに潜む子どもの発達的要素
（領域「環境」の視点から）

このプロセスを泥団子作りに当てはめてみる[ii]（図表１）。泥団子作りに興味を持っている子どもは、砂・土・水といった身近にある容易に変化する素材との関わりを楽しみながら、次第に物質の性質を理解していく。何度も泥団子を作りながら、砂と土の違い、さらには同じ土であっても湿り具合でその性質が異なることなどを体験的に理解していく。そして、理解した物質の性質を利用して、芯にする土、芯の周囲を固める土、湿り気を取るための土など、素材を使い分けていく。どのようにすればもっときれいな泥団子ができるのか試行錯誤するなかで、物質の性質を生かして考えたり、工夫したりするなど、多様な関りを楽しむようになる。これは科学的な思考力の芽生えともいえる。

また、泥団子作りには、落ち着いて作業を繰り返す根気、壊れないように物を大切にする気持ち、壊れた悔しさから立ち直ろうとする気持ち、壊れた悔しさを調整しようとする気持ち、完成するまでのプロセスを楽しむこと、完成したときの喜びや感動・達成感を味わうことなど、さまざまな感情を伴う体験が含まれる。これらは、社会情動的スキルまたは非認知能力と呼ばれるものであり、知的な問題解決の土台となる大事な部分である。

幼児期の教育では、子どもたちが主体的にいろいろな物に関り、試行錯誤しながら自分にとっての意味を見出していくことが重要であり、このプロセスを通して子どもたちの学びが成立していく。幼児期の学びというのは、教える側が用意した物事を覚えることではない。子どもたちが環境に関わって、そこに意味を見出していくうちに、さまざまなことを身につけていくことである（文部科学省、2018 b）。

これらのことから、泥団子作りは物質の性質理解や思

考力の芽生え、さまざまな感性が育つ遊びであり、幼児期の子どもに相応しい学びの体験を保障する教材だといえる。

３．泥団子の制作方法による分類

泥団子作りは、泥の感触を味わったり、ただ丸めたりするだけでも楽しい（図表２）。まずは、子どもたちもこの段階から遊びをスタートさせる。次第に泥団子作りにのめり込んでいくうちに、より丸く、硬く、表面の滑らかな泥団子を追求するようになっていく。そして、子どもたちのなかから、ぴかぴかに光る泥団子を作り上げる名人が誕生することがよくある（図表３）。

図表２　幼稚園の年中児たちが作った泥団子

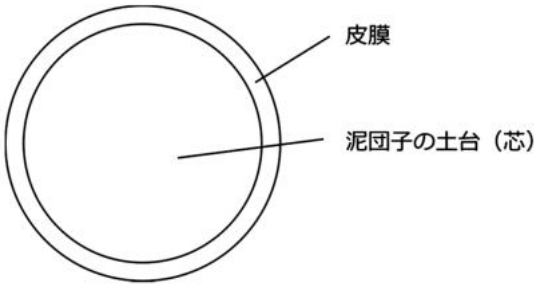
図表３　泥団子名人（年中児）が作った光る泥団子（右側）

どのよう作れば名人級の光る泥団子が作れるのだろうか。一口に光る泥団子といっても、その素材や製法によってさまざまな制作方法がある。半（2008）は、調査資料や自身が参加したワークショップ等をもとに、光る泥団子の制作方法を分類・整理している（図表４）。この分類が示すように、光る泥団子の制作方法は、皮膜作りの段階で、土を素材として使う場合と漆喰を使う場合とに大別することができる。しかし、どちらの方法であっても、①土台作り→②皮膜作り→③磨きの３段階が、光る泥団子の制作工程の基本となっている。

2019 年度の「卒業課題研究」では、皮膜にさら粉を使用する制作方法を採用し、教材研究をおこなっている。

皮膜	方法	提唱者・紹介者	難易度	表面を磨く方法
土で作る	皮膜にさら粉を使用	加用文男ほか	難しく熟練を要する	手、布、ビニール袋、シャーレ、スプーンなど
	土台・皮膜に粘土質の土を使用	有限会社東邦産業社	子どもでも容易に光らせる	盃
	皮膜に色どろを使用	INAX ライブミュージアム土・どろんこ館ワークショップ	子どもでも容易に光らせる	ビン、フィルムケースなど
漆喰で作る	皮膜に漆喰を使用	広島郷土資料館ワークショップ	土台作りが難しい、子どもでも容易に光らせる	盃

半（2008）を一部改変して筆者が作成



図表４　光る泥団子の構造と制作方法による分類

皮膜にさら粉を使用する制作方法を研究したのは、最も一般的な制作方法であり、子どもたちが園で泥団子を作る時と同じ方法だからである。この制作方法を開発・習得することで、実習場面などで子どもたちの泥団子作りを支えることが期待できる。なお以降の記述では、皮膜にさら粉を使用して制作する泥団子を「普通の土で作る」光る泥団子と呼び、表記を統一する。

４．教材研究Ⅰ（2019 年度）
:「普通の土で作る」光る泥団子

一般的に知られている「光る泥団子」である（図表５）。制作方法は、泥団子の大家である加用（2001 a、2001 b）によって体系化され、広く知られている。先行研究を参考にしながら、筆者と学生らは泥団子作りを繰り返し、次に示す準備物および制作工程にたどり着いた。

図表５　「普通の土で作る」光る泥団子の例

⑴　準備物

次の７点を準備しておく（図表６）。①芯になる土、②乾いた土（さら粉）、③水、④ふるい、⑤磨くための布、⑥ビニール袋、⑦タオルである。

泥団子の芯に適しているのは、細かくて粘り気のある粘土が混じった土である。粘土が混じているかどうかを見分けるには、土に水をかけ、ぐちゃぐちゃに混ぜて手に取り、ぎゅっと握る。その後、手を開いたときに、形が崩れず、手の跡が残っていれば、粘土が含まれていると判断することができる。

図表６　「普通の土で作る」光る泥団子の準備物

一方、さら粉は粉のように細かく、風がふくと煙のようにふわっと舞い上がる、さらさらに乾いた土が適している。ふるいを使って、ごみや小石を取り除くともに、さら粉のきめをより細かくしておくとよい。

団子を磨く布は、目が細かくざらっとした布を使用する。ジャージ素材がおすすめである。その他、団子を乾燥や傷から防ぐためのビニール袋やタオルも用意しておく。

⑵　制作工程

制作過程は、次の４つの工程に分かれる（図表７）。それぞれの工程にかかる標準的な所要時間の目安を示してある。熟達すれば、２時間～３時間程度で、丸くて硬い光る泥団子を作ることができるようになる。以下、工程ごとの手順と制作時のポイントを示す。

①土台作り

団子の芯になる部分を作る工程である。芯になる土に、少しずつ水を加え、どろどろにしていく。少量を手に持ち、おにぎりを作る要領で丸めていく（図表８）。両手で硬く絞り、しっかりと水分をなくしながら丸く成形する（図表９）。このとき、団子の表面にある小石やゴミがあったら、きれいに取り除いておく。小石やゴミがあると、その後の工程において、きれいな球体にならないためである。

②球体作り

団子に土をふりかけながら、きれいな球体にしていく工程である。ふりかける土は、最初は乾いた芯になる土を、その後はさら粉を用いる。ふりかけた土をふり落とし、指で優しくなぞりながら、形を整えていく（図表10）。この作業を何度も繰り返し、きれいな球体にしていく。作業終了の目安は、団子の表面が乾燥しているか否かである。団子の表面にふりかけた土を息で吹いた時に、その土が吹き飛ぶかどうかで判断をする。そして、水分を飛ばすためにビニール袋に入れて、30 分～１時間休ませる（図表 11）。このとき、団子の表面が傷つかないよう、下にタオルを敷いておく。

③皮膜作り

さら粉をつけてこすり、団子の表面を滑らかにしていく工程である。まず、団子にさら粉をかけ、少しずつ力を加えながら、手のひらで団子の表面にすり込むようにこすっていく。次に、さら粉を手でなでまわし、手のひらに付着させる（図表 12）。その手で団子の表面をもう少し力を入れて、こすりつける（図表 13）。表面全体をまんべんなくこすり、表面がより滑らかになるまでおこなう。そして、再度ビニール袋に入れて休ませる。

④磨き上げ

布で磨き、光らせる仕上げの工程である。ビニール袋から取り出すと、団子は少し湿っている。少し乾かしてから、ジャージ生地などきめの細かい布で磨いていく。もし、光らなければ、また少し休まるか、さら粉をこすりつけてから、同じように磨いていく。湿り気がなくなるとともに、表面が滑らかになり、光沢を帯びてきたら完成となる。

なお、完成後数日間は、団子内の水分が少しずつしみ出てくるため、ティッシュペーパーに包み保存する。団子が完全に乾燥するまで、定期的にティッシュペーパー交換をするという手入れが必要である。

① 土台作り
団子の中心部分を作る
［所要時間：５～10分］

▶

② 球体作り
土をかけながら丸くする
［所要時間：30～40分］

▶

③ 皮膜作り
表面をこすり、
きれいな皮膜にする
［所要時間：60分～］

▶

④ 磨き上げ
布でみがき、光らせる
［所要時間：適宜］

図表７　「普通の土で作る」光る泥団子の制作工程

制作時のポイント　制作時のポイントを以下にまとめておく（図表 14）。すべての工程において、丁寧に時間をかけることが重要となる。その一方で皮膜作りの後半の段階以降では、団子をごしごしと力強くこする大胆さも必要となる。

泥団子のアレンジ　完成した泥団子の表面は、コーティング加工されたように艶があり滑らかになっている。そのため、絵の具やポスターカラー、マジックなどを使用して、着色することも可能である（図表 15）。

泥団子への着色に関しては、完成後に表面に色を塗る方法のほかに、下茂（2008）よれば、色土をさら粉として使用する方法やさら粉に着色する方法が知られている。図表 16 は、黒いさら粉で皮膜を作った泥団子である。バーベキュー用の市販の炭をおろし金で削って作成した炭パウダーを、公園で採取したさら粉に混ぜて使用している。

図表８　①土台作り　水分量の目安および団子の丸め方の要領

図表９　①土台作り　工程終了時の泥団子

図表 10　②球体作り　芯になる土をふりかけた状態

図表 11　②球体作り　ビニール袋に入れて水分を飛ばす

図表 12　③皮膜作り　さら粉を手に付着させる

図表 13　③皮膜作り
さら粉の付着した手で団子表面をこすりつける

- 土台作りの段階で団子の表面に小石やゴミがない状態にすること
- 焦らず時間をかけて球体作りを行うこと
- 団子の水分を抜くための時間（休憩時間）をしっかり取ること
- 皮膜作りの段階できめの細かいさら粉を使う
- 団子を磨く力加減に気をつける最初はやさしく、だんだん強く。

図表 14 「土で作る」光る泥団子　制作時のポイント

このように、工夫次第で泥団子にさまざまなアレンジを加えることが可能である。ただし、色土は比較的高価[iii]であり、絵の具等を利用してさら粉に色をつけるのはかなり手間がかかる[iv]。泥団子への着色を考えた場合、比較的安価であり、手軽にさまざまな色を調合できることから、市販の漆喰クリームに水彩絵の具を混ぜる方法が現実的である。そこで、2020 年度の「卒業課題研究」では、皮膜に漆喰を使用する制作方法を採用し、泥団子への着色を中心に教材研究をおこなっている。なお以降の記述では､皮膜に漆喰を使用して制作する泥団子を｢漆喰で作る」光る泥団子と呼び、表記を統一する。

５．教材研究Ⅱ（2020 年度）
:「漆喰で作る」光る泥団子

「漆喰で作る」光る泥団子（図表 17）と「普通の土で作る」光る泥団子の決定的な違いは、皮膜作りに漆喰を用いる点である。漆喰を用いる利点が２つある。１つ目は、着色が容易な点である。例えば、市販の水彩絵の具を使用することでさまざまな色を調合することができる。２つ目は、光沢を出しやすい点である。日本の伝統技術である左官には、漆喰壁を鏝で磨いて光らせる「磨き壁」という技法がある。この技法が示すように漆喰は、土にくらべて光りやすい性質をもっている。

(1)　準備物

次の９点を準備しておく（図表 18)。①荒木田土、②目の細かい砂、③水、④麻またはワラ、⑤ビン、⑥漆喰クリーム、⑦水彩絵の具、⑧オリーブオイル、⑨柔らかい布である。

荒木田土は水田の土ともいわれ、粘土質を多く含んでいる。ホームセンター等で市販されているため、入手しやすい。目の細かい砂は、公園の砂場の砂を使用している。麻は事前に、麻ひもをハサミで切って湯通ししてほぐしてある。漆喰クリームは、土佐漆喰という高知県産の漆喰を原料とするタナクリーム＃ 200[v]を使用している。また、色づけに使う水彩絵の具、団子を磨く時に使うビンや柔らかい布、オリーブオイルも用意しておく。

図表 15　泥団子のアレンジ例
着色（左・中央：ポスターカラー、右：絵具を使用）

図表 16　泥団子のアレンジ例
さら粉に炭パウダーを混ぜて制作

図表 17 「漆喰で作る」光る泥団子の例

図表 18 「漆喰で作る」光る泥団子の準備物

① 土台作り	② 土台作り	③ 中塗り	④ 着色	⑤ 磨き上げ
団子の中心部分を作る [所要時間：３～４日]	（土台作り） ビンを使って丸くする [所要時間：20～30分]	（皮膜作り） 中塗りをして団子の表面を滑らかにする [所要時間：30～40分]	（皮膜作り） 団子に色づけした漆喰を塗る [所要時間：20～30分]	ビンでみがき、光らせる [所要時間：10分]

図表 19 「漆喰で作る」光る泥団子の制作工程

⑵　制作工程

制作過程は、次の５つの工程に分かれる（図表 19）。それぞれの工程にかかる標準的な所要時間の目安も示してある。最初の工程で泥団子を完全に乾燥させる必要があるため、完成まで５日程度かかる。２時間～３時間程度で完成する「普通の土で作る」光る泥団子にくらべ、「漆喰で作る」光る泥団子は制作にかなりの時間を要する。以下、工程ごとの手順と制作時のポイントを示す。

①土台作り

材料を混ぜて丸め、団子の芯を作る工程である。配合比率は、荒木田土：砂：麻＝１：１：0.5 が基本となる（図表 20）。荒木田土と砂、そこに麻を入れることで、さらに強度が増す。荒木田土、砂、麻を手でよく混ぜあわせてから、少しずつ水を加え、どろどろにしていく。丸めていく要領は、「土で作る」光る泥団子と同じである。その後、日陰で３～４日かけて、完全に乾燥させる。団子の自重で変形するため、乾燥中に時々転がしたり、手で丸め直したりして球形に整える。

②球体作り

ビンの口を使って団子を削り、きれいな球体にしていく。手で団子を丸く成形していく「土で作る」光る泥団子とは、大きく異なる工程だ。ビンの口の部分に団子をおき、くるくると団子を回転させ、団子の表面を削っていく（図表 21）。団子の表面がビンの口の部分にぴったり合うまで繰り返していく。なお、木工ホールソー[vi]を使うことで、この工程にかかる時間を大幅に短縮することができる。

③中塗り

泥を塗り、団子の表面を滑らかにしていく工程である。まず、荒木田土に水を加え、ぬるぬるの状態にし、中塗り用の泥を作る（図表 22）。そこに砂をひとつまみ入れ、これを中塗りとして使用する。ビンの上に団子を置き、作った中塗りを団子の表面に指で薄く塗り拡げ、しばらく乾かす。中塗りが乾いたら、団子をビンの上で回転させて、表面を均していく。この手順を数回繰り返していくと、団子の表面が滑らかになっていく。この工程を終えるだけでも、光沢のある泥団子が出来あがる（図表 23）。

④着色

漆喰クリームを団子の表面に塗り拡げる工程である。漆喰クリームを２層に分けて塗っていく。ここが最も難しく、団子の仕上がりに大きく影響する工程である。まず１層目は、無着色の白い漆喰クリームを表面に指で薄く塗り拡げる。乾燥させている間に、漆喰クリームをパレットなどに移し、水彩絵具を適量混ぜて、色つき漆喰クリームを作っておく（図表 24）。２層目は、その色つき漆喰クリームを塗り重ねていく。１層目と同じ要領で塗り、しばらく乾燥させる。これを２～３回繰り返して

図表 20　材料の配合比率

図表 21　②球体作り　ビンを使って団子を丸くする

図表 22　③中塗り　中塗り用の泥（荒木田土と砂）

図表 23　③中塗り　中塗りを終えた泥団子

図表 24　④着色
水彩絵の具を混ぜ、色づけした漆喰クリーム

いく。漆喰クリームは、表面にムラができないように、指先で丁寧に全体にのばしていく（図表 25）。

⑤磨き上げ

ビンの口を団子の表面に当て、円を描くようにくるくると回しながら、団子を磨く工程である。もう一度漆喰クリームを薄く塗り拡げ、今度は生乾きのうちに、ビンを使って団子の表面を磨いていく（図表 26）。一部分に偏ることなく、団子の表面全体をまんべんなく磨いていく。数分間磨いていくうちに、きゅっきゅっという音がなりはじめる。完成間近の合図である。そのまま磨き続け、団子の表面に光沢が出てきたら、完成である。磨き後の仕上げとして、柔らかい布にオリーブオイルをつけ、団子を拭きあげると、さらに光沢感が増す。

図表 25　④着色
指で漆喰クリームを塗り拡げる

図表 26　⑤磨き上げ
ビンの口を利用して磨き上げる

制作時のポイント　漆喰を磨き光沢のある泥団子にするためには、「普通の土で作る」光る泥団子とは異なる点に注意が必要になってくる。制作時のポイントを以下に示す（図表 27）。これらから、「漆喰で作る」泥団子を光らせる２つの条件がみえてくる。１つ目の条件は、土台作り・球体作り・中塗りの工程を経て、芯になる団子をいかに真球に近づけることができるかだ。真球に近ければ近いほど、磨き上げの工程でビンの口が団子の表面にぴったりあたり、漆喰がしっかりと磨かれるからである。２つ目の条件は、着色・磨き上げの工程において、漆喰クリームを適切に扱い、重層的に塗り重ねることができるかだ。漆喰クリームの適切な扱い方として、着色の工程では、漆喰クリームをできるだけ薄く伸ばし、十分に乾かしてから、次の漆喰クリームの層を塗り重ねていく。一方、磨き上げの工程では、漆喰クリームが乾ききる前の生乾きの状態のときに、ビンの口を使って塗り拡げていく。つまり、塗り重ねるときは十分に乾いた状態、光らせるときは生乾きの状態というのが、漆喰クリームの適切な扱い方である。

- 土台作りでの乾燥の段階では完全に乾く前に何度か丸め直す
- 球体作りのとき、団子の表面がビンの口にぴったり合うまで削る
- 漆喰クリームは薄くムラなく塗る
- 漆喰クリームを塗り重ねるときは下の層が乾いてから
- 磨き上げでは漆喰クリームが生乾きのうちにビンで塗り拡げる
- 磨き上げの最後の段階で光沢が出てきたら磨き過ぎない

図表 27 「漆喰で作る」光る泥団子　制作時のポイント

「漆喰で作る」光る泥団子の魅力

着色をして磨き上げた泥団子の表面をみると、色の濃淡のある自然な模様が現れている。例えば、図表 28 に示す泥団子は、まだら模様が美しく、どこか神秘的な印象を受ける。夜空に浮かぶ惑星をも連想させる仕上がりとなっている。

この色味や模様は、完全な真球ではない団子の形状、制作者の漆喰クリームの取り扱い方や塗り重ね方によって現われ方が異なると考えられる。どのような色味や模様が出るかは、団子一つひとつ、また制作者のくせによって違ってくる。つまり、世界に１つしかない泥団子が出来あがるのである。これはまさに「アート」である。これらの点から、筆者らは「漆喰で作る」光る泥団子のことを、「アート泥団子」と呼んでいる。

図表 28　団子の表面：色の濃淡のある自然な模様

６．おわりに
：泥団子作りの面白さ

2019年度から２年間、「卒業課題研究」において学生たちともに、泥団子作りをおこなってきた。常に泥団子作りの教育的な意味を考えながら、2019年度は「普通の土で作る」光る泥団子、2020年度は「漆喰で作る」光る泥団子について教材研究を進め、現時点で最適と考えられる制作方法を見いだした。最後に、学生たちと泥団子を作り続けることで見えてきた泥団子作りの面白さについて、いくつかの点からまとめておく。

１つ目は、マニュアルが通用しないという点である。本稿では、「普通の土で作る」「漆喰で作る」光る泥団子の制作方法を明らかにした。これを正しい制作方法、いわゆるマニュアルと位置づけたとしよう。マニュアル通りに制作を進めることで、丸い団子にはなるが、必ず光るかといえば、そうとはいえない。光らない場合も多々ある。例えば、「普通の土で作る」光る泥団子の場合、泥団子の材料となる土は、地域や場所によって組成が大きく異なる。加えて、制作工程における湿度や温度、時間やタイミング、作り手の力の入れ具合や磨き方のくせなどさまざまな要因によって、泥団子の出来栄えは変わってくる。試行錯誤を繰り返しながら、最適な方法を探りあてていくしかない。それが、泥団子作りの面白さでもある。

２つ目は、遊びに浸り込み、全身の感覚で集中し、泥団子と一体化するような感覚体験が得られる点である。汐見ら(2001)によれば、「人間の皮膚感覚がベースになって、人間には周囲や他のものにとけこんで一体化していく能力がある」という。また、矢野（2006）は「遊びは自分と世界との境界線が溶けてしまい、子どもが全体的に世界とかかわり生命に触れる溶解体験だ」と述べている。泥団子作りは、自分の感覚を総動員して泥団子に向き合う。①土台作り→②皮膜作り→③磨きの基本工程を経て、少しずつ変化してく泥団子を自分の成長のように喜び、さらに泥団子作りにのめり込み、泥団子と自分が一体化していくような感覚さえ生じる。

３つ目は、完成した光る泥団子を誰かに見せたいという気持ちである。泥団子作りに浸り込み、集中して、泥団子と一体化したからこそ生まれる感情だと考えられる。とにかく光輝く泥団子を見せたくなるのである。汐見ら(2001)はこのことを次のように表現している。「作った人がすごいのではなくて、作ったものがすごいと思ってもらいたい」と。つまり、見せたくなるのは頑張って作った自分ではなく、泥団子そのものなのである。

泥団子作りは、作り手が試行錯誤しながら制作し、その過程で泥団子と一体化するような感覚を味わいながら、完成へと向かっていく。そして、ついに仕上げた光る泥団子を認めてもらうことで、喜びや達成感が高まり、また作りたくなってしまうのだ。こうした泥団子作りの面白さは、幼児はもちろん、小学生、中・高生、大学生、さらには大人までも夢中にさせる力があるのではないだろうか。今後の課題として、体験的に理解した泥団子の作りの面白さ、そして魅力を広く発信していきたい。2021年度の卒業課題研究では、学生たちとともに、泥団子魅力発信を中心的なテーマとして活動を継続していく予定である。

注

i 幼児が生活を通して発達していく姿を踏まえ、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものを「ねらい」と呼ぶ。「ねらい」を達成するために教師が幼児の発達の実情を踏まえながら指導し、幼児が身に付けていくことが望まれるものを「内容」と呼ぶ。

ii 本報では、図・表・写真をまとめて図表と表記して示す。

iii 色土は、漆喰や土壁の材料を扱う専門店で取り扱いがある。

iv 例えば絵の具でさら粉を着色する場合は、乾燥期間を含めて２日から３日かかると考えられる。具体的には、さら粉に絵具を混ぜ合わせ乾燥させる。さら粉が絵具で固まっているので、手で十分にほぐす。ふるいにかけて、さら粉のきめを細かくする。これらの工程が必要になってくる。

v 田中石灰工業株式会社石灰部が運営するオンラインストア「タナクリームでDIY!!」（https://www.tanacream.com/）で購入することができる。

vi 木材に穴を開けるための工具。通常、ドリルドライバーやインパクトドライバーなどの電動工具に取り付けて使う。団子を削る場合は、安全のため電動工具は使用せず、ホールソーを手に持ち、団子の表面に刃を当てて、円を描くようにくるくると回しながら、削っていく。

引用文献

加用文男　2001 『光れ！泥だんご　普通の土でのつくりかた』 講談社

加用文男　2001 『光る泥だんご』 ひとなる書房

文部科学省　2018 a 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館　p .196

文部科学省　2018 b 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館　p .28-29

半　直哉　2008 「光るどろだんご」作りに関する基礎研究　山陽学園短期大学紀要　39巻　p .77-83

汐見稔幸・加用文男・加藤繁美　2001 『これが、ボクらの新・子どもの遊び論だ』 童心社
下茂喜子　2008 『ピカピカ泥だんごの作りかた』 宝島社
矢野智司　2006 「幼児教育の独自性はどこにあるのか⑹」『幼児の教育』105 巻第２号ｐ .8-13

謝　　辞

本稿で報告した「卒業課題研究」における取組の一部は、2020 年度日本教育公務員弘済会佐賀支部奨励金の助成を受けて実施した。